

# 目次

|  |    |
|--|----|
| 日本語版によせて……………                          | 1  |
| 序……………                                 | 7  |
| 第1章 包摂の戦略とそのアポリア……………                  | 17 |
| はじめに……………                              | 17 |
| 1 徳川幕府のイデオロギー——新たな社会秩序のなかで身体を構想する…………… | 20 |
| 2 都市の空間と異種混合……………                      | 36 |
| 3 初期徳川時代における権力の両義性と意図せざる歴史的展開……………     | 41 |
| 4 アノマリーなるものたち……………                     | 49 |
| 5 感性の構造——浮世と中間的存在……………                 | 54 |
| おわりに……………                              | 64 |

第2章 後期徳川文化におけるパロディと歴史……………67

はじめに……………67

1 貨幣、パロディ、新しい社会空間の生産……………69

2 テクストと批評……………80

3 パロディと表象空間……………83

4 変革行為としての遊び……………91

5 相対主義とフェティシズムとしてのパロディ……………97

おわりに……………108

第3章 コミック・リアリズム——転倒の戦略……………111

はじめに……………111

1 パロディの一形式としての滑稽あるいはコミック・リアリズム……………113

2 転倒というテクネー——うがち、嘲り、あるいは辛辣な告発……………117

3 うがちを演じる身体……………130

4 江戸民衆文化における笑いとその象徴的意味……………145

おわりに——コミック・リアリズムの能力とその意義……………153

第4章 グロテスク・リアリズム——カオスの戦略……………157

はじめに……………157

1 「異様」「奇怪」あるいはグロテスクという概念……………162

2 人間性の新たなビジョン……………171

3 グロテスクなもの場所……………181

4 カオス世界の表象……………196

おわりに——グロテスク・リアリズムの潜在力とその意義……………212

第5章 近代化する日本と身体の変容……………217

はじめに……………217

1 新しい身体政治……………219

2 身体としての「風俗」……………229

3 権力の新形態、新たな主体……………233

おわりに……………248

補章——歴史的叙述と本書の理論的視座……………263

注……………291

訳者あとがき(本橋哲也)……………339

文献一覧

索引

## 凡 例

- 1 本文および注に引用した、明治期以前の史料・作品については、読みやすさに配慮して、表記に以下のような変更を加えた。
  - ・漢字は新字体に改め、振り仮名を適宜補った。
  - ・歴史的仮名遣いは現代仮名遣いに改めた。
  - ・漢字仮名交じり文の中のカタカナをひらがなに変え（掛け声など、例外的にカタカナを残した場合もある）、濁点および句読点を適宜補った。
- 2 外国語文献の引用に際しては、日本語訳が刊行されているものについては原則としてそれを用いたが、訳者（または著者）の判断により、訳者による日本語訳を用いたり、既存の邦訳書の翻訳に一部修正を加えた場合がある。
- 3 本文および引用文中の**太字**は、すべて引用者（著者）による強調を表す（引用文においても、原文の強調箇所にとらわれず、引用者による強調箇所を改めて**太字**で示した）。
- 4 引用文中の「」は引用者による補足・注記を表す。



## 日本語版によせて

風俗と呼ばれる庶民の生活文化の統制が頻繁におこなわれた時代、それが江戸時代だった。日常の生活領域がこれほど権力の干渉を受けた時代は、他には明治時代の初期、アジア太平洋戦争期、戦後の占領期くらいなのではないだろうか。なぜ革命や戦争、内乱や一揆とは無縁で非政治的とも言える風俗が、社会統治の要とされたのか。江戸時代は「天下太平の世」と形容されることが常だが、これを風俗統制という視点から再検討してみると、一見平穏な江戸の社会は、実は「戦争」状態をミクロのレベルで持続していたようにも思えるのだ。血なまぐさい戦国時代に終止符を打ち、新たな社会秩序の構築を推し進めていた幕藩体制は、まったく別の次元で「戦争」を続けていたのだ、と。

ミシエル・フーコーが一世紀にわたって続いた宗教戦争に幕を下ろした一七世紀のヨーロッパについて語った言葉に倣えば、江戸時代の「平和は、その最も小さな歯車においてさえ、暗黙のうちに戦争を続けて」いたのであり、「戦争、それは平和の暗号そのものである」と言い直すことができるかもしれない(フーコー『社会は防衛しなければならぬ』)。

平和とは、権力(主権者や国家)と社会との、あるいは社会間での軋轢や対立を極力抑え、それを保持している状態を指すと定義できるだろうが、そのような状態は、容易に持続できるものではない。それは、江戸時代の風俗への干渉をはじめ、世界中でおこなわれてきた検閲や奢侈禁止令しやしなどが示す通り、統制や抑圧、規律や刑罰、規範やイデオロギーといった「平和の暗号」によって維持されている。平和を創造し、維持することは、権力による絶え間ない干渉、つまりある種の暴力の行使を必ず伴っているし、そのような暴力の行使を自然化し、不可視化するさまざまなイ

デオロギー装置を前提としている。

風俗とは、思想、感情、嗜好といったものが表出する際の形態、あるいは戸坂潤の言葉を借りれば「社会生活の臨床的徴候」だといえる。何かしらの価値や道徳、感情や感性、好みといったものが社会現象として顕在化するのが風俗という形態だ。本書は、統制の対象になったこれらの風俗、さらにそれを表象した文化形式(culture)、その形式を生み出した歴史的状况(経済的、政治的、文化的狀況)を分析することで、近世の権力の有り様(modernity)を理論化できるのではないかという仮説の上に書かれた。またこの仮説は、近世の権力の有り様が明治時代に入ってどのように変容したのかを考察することを可能にし、近代日本の権力の様態とそれを支えた価値体系を分節化する視点を提供できると考えている(この方法論をめぐる問題意識は「補章——歴史の叙述と本書の理論的視座」を参照されたい)。

歴史を書くという行為は、多かれ少なかれ「いま」の問題意識に導かれているものだろう。ニーチェ風に言えば、歴史叙述は、生に結びついた目的、つまり、「いま」をどのように生きるかという問いと不可分の関係にある。過ぎ去りし時、あるいはそこに生きた人びとの経験をどのように想起し語り直すのかという問いは、歴史家の思索の中で「いま」と「過去」が交差する瞬間にある種の方向性が与えられよう。だからこそ、歴史家の問いは、「いま」という時の移り変わりとともに絶えず変遷してゆくものだし、歴史家たちの百人百様な分析や解釈は、彼ら彼女らの過去と向き合う姿勢の違いを反映しているものなのだ。歴史家は自らの歴史性を抱えつつ、それに導かれ、また引きずられながら過去と向きあっている。

本書も、ある特定の歴史性を反映している。日本のバブル時代に青年期を過ごした私は、本来の意味での政治、つまり「より良く生きる」ための対話、議論、活動を涵養する公共空間が風化していく有り様を実感しながら学生時代を送った。当時、一世を風靡していたポストモダンの言説は、消費社会の論理を内面化させた没歴史的・没社会的な個人主義の変種のように思われてならなかったし、それと連動する形で盛んになった江戸ブームも、どこか自画自賛

的な日本人論の焼き直しのように感じられた。そのような思いを抱えて、一九九六年にアメリカのシカゴ大学で研究を始めた。シカゴでは、ポストモダンズムの動きに注意を払いつつも、近世の読み直しを通して近代を問い直すという作業が進められていた。一九七〇年代の後半からテツオ・ナジタやハリー・ハルトゥーニアンを中心に始められた江戸思想史の読み直しがその最盛期を迎えていたのだが、のちにシカゴ学派と呼ばれるこのような知的取り組みは、必ずしも一貫した方法論や思想的傾向を持っていたわけではない。もし、シカゴで研究した者たちに何らかの共通項があったとすれば、それは多様な批判理論（ポスト構造主義、文化マルクス主義、カルチュラル・スタディーズなど）をとおして、江戸の思想史を読み直し、近代の意味を捉え直すという知的姿勢であったといえるだろう。私は、ナジタの啓蒙思想の批判的な再評価、ハルトゥーニアンのイデオロギーと文化政治をめぐる斬新な分析、ヴィクター・コシユマの政治的主体性と革命をめぐる考察、そして酒井直樹の翻訳と主体の理論的作業から多くの刺激を受けつつ、政治や権力の問題をどのように捉え直すべきかという問いに導かれながら近世研究に足を踏み入れていった。

私はポストモダンの風潮の中で「政治」の風化を感じつつも、「変革的な主体」を政治の存在論的前提として再び立ち上げることに強い違和感を抱いていた。それは同時に、戦後の主体性論争や新左翼運動以降先送りされてしまった「政治」をめぐる議論を新しい形で取り上げてみたいという気持ちの反映でもあった。近代の政治概念が、「自由の実現に向けて歴史に働きかける人間主体」という理念を大前提にしている以上、その理念を再生産しない形で、どのように新しい「政治」の分析方法を見出すことができるのか、この問いが本書を書くにあたって決定的に重要な意味をもっていた。それは、英語版では「序論」で、日本語版では「補章——歴史的叙述と本書の理論的視座」で展開したヘーゲル流の歴史解釈の批判という形で現れた。また、ヘーゲル流の批判は、ヘーゲルの歴史哲学に依拠しながら、ほぼ無意識のうちに、西欧中心主義の進歩史観を再生産し続ける北米の歴史研究への異議申し立てでもあった。そういった意味で、ガヤトリ・スピヴァクのポストコロニアル批評やスチュアート・ホールのカルチュラル・スタデ

イズが目指していた知の「脱植民地化」という視点に大いに触発されながら進めた研究でもあった。とくに、ホルの「保証なきマルクス主義」、「アルチュセールとポスト構造主義」、グラムシの再読に見られる政治主体の再考からは多大な影響を受けた。政治的主体性の成熟度（もちろんその絶対的基準はつねに西欧に置かれてきた）を論じたり、近代的自我の形成の有無を論じたりすることで、革新的思想や運動の成否を見定めていくような歴史分析ではなく、文化表象の形態（言葉やイメージと言われる記号とそれに伴う実践）とその社会政治の意味を歴史的徴候として読み解いていく思索が始まった。

ある特定の文化表象の形式が、どのような権力関係の中で生まれ、どのような社会関係を作り出し、どのように社会的実践や言説へと変容していったのか。そのようなつながりや実践をとおして生まれた社会空間は、どのような歴史意識を表明し、どのように権力やイデオロギーと交渉をおこなったのか。これらの問いを探求することで、これまでとは違った「政治」の捉え方、文化創造やそれを可能にした社会空間の意義を論じられると考えた。

江戸時代後半に生まれた表象の諸形式は、民衆芸能のなかに根付いていたパフォーミングな身体をモチーフとしていた。身体は、権力が社会秩序の構築と維持にとって不都合なものを囲い込もうとする戦略の最前線であり続けた。それは、身体が生み出す多様な記号とそのパフォーマン스가、安定した統治を目指す幕藩体制の構造とそれを支えるイデオロギーの矛盾を分節化して見せたからである。この傾向は、一見すると、明治時代に入ってから「風俗改良」政策をとおして継続したように見えるだろう。しかし、明治の言説も政策も、身体の実践を骨抜きにしなから、「心」の同質化を図ることによってそれを統治の新たな標的にしていったのである。近代の権力のあり方が、生そのものをその内面から囲い込んでいく有り様は、江戸の権力との比較によって初めて有効に歴史化できるだろう。そういった意味で、本書は、近世の権力と近代の権力がそれぞれ想定した心身関係を、歴史的変容の中に位置づけながら、フリーコーがいう意味での（その分析方法は異なるが）主体の系譜学を描くことを目指している。

文化理論、演劇史、ポストコロニアル・スタディーズを牽引してこられた本橋哲也さんに本書を訳していただけたことはとても光栄なことでした。本橋さんのご尽力に心から感謝いたします。また、原本（英語版）と邦訳版を出版する過程で大変多くの先学や友人から個人的に学ばせていただきました。ここですべての名前を挙げることはできませんが、以下の方たちには特に感謝の気持ちをお伝えしたい。テツオ・ナジタさん、ハリー・ハルトウニアンさん、酒井直樹さん、ヴィクター・コシユマンさん、ウイリアム・シューウエルさん、成田龍一さん、岩崎稔さん、富山一郎さん、ノーマ・フィールドさん、キャロル・グラツクさん、スチュアート・ホールさん、タイモン・スクリーチさん、タカシ・フジタニさん、長原豊さん、柄谷行人さん、ギャヴィン・ウォーカーさん、ステファン・タナカさん、葛西弘隆さん、鳥羽耕史さん、内藤千珠子さん、高築蘭さん、石原俊さん、磯前順一さん、竹沢泰子さん、小田龍哉さん、石原真衣さん、徐禎完さん、全成坤さん、アン・ウォルソールさん、福岡真紀さん、ジェイムス・ケトラーさん、ロバート・シュトルツさん、リチャード・レイタンさん、アンドリュー・バーシエイさん。

そして、岩波書店の入江仰さんは、コロナ禍で図書館や資料館が閉鎖する中、とても辛抱強く、きめ細かな編集作業をおこなってくださいました。本書が英語版よりも充実した内容に仕上がったのは、ひとえに入江さんのおかげです。心から感謝申し上げます。

二〇二二年の春、ロサンゼルスにて。

平野克弥



## 序 章

過去数十年の学問の世界はポスト構造主義の言説の波に洗われてきたが、それ以来、解釈の認識過程に自己反省的な歴史家や社会科学者にとって、自らがどんな解釈の布置にあつて、自分の仕事がどんな理論的視野によつて形作られてきたかを述べるのが通例となつてきた。今ではそのような行いは儀礼的で通俗的なものとなつた感はあるが、それでもきわめて重要なことであると思われる。その理由は、いかなる解釈も、解釈者の自覚の有無にかかわらず、ある種の理論的視野を間違ひなく前提とし、ある特定の方法的立場を含むからだ。理論は、歴史家が特定の歴史的問いを設定し、それに応答しようとするさいの方法に内在しており、それを切り離すことはできない。フレドリック・ジェイムソンが明晰に述べているように、「方法論の出発点は、探究の目的を明らかにするだけでなく、それを現実に作りだす」のである。<sup>(1)</sup>しかしこのことは、歴史と理論との関係が一方通行であることを意味しない。むしろそれは終わりなき相互交渉であり、フィードバックの円環なのだ。歴史家はこのような歴史と理論との網の目のなかで、現存する文書資料やイメージの断片を探り、無数に混淆した声の泡沫を取り扱う。<sup>(2)</sup>限りなく錯綜した歴史的現実の物質的痕跡と、そうした現実を概念として把握することのあいだで、弁証法的にまた対話的に交渉を繰り返しながら、歴史家は探求に値すると判断する問いを形成する可能性へとようやくして辿り着くのである。

本書の核となる問いに関してもそれは例外ではない。一見終わりのない歴史と理論をめぐる省察の相互交渉をと

して、私がこだわってきた問いは、日本近代の革命的な変化を理解するのにきわめて重要な、文化の政治学を分析するための新たな視野を、どのように構築するのか、さらに近世と近代という時代状況における政治と文化との一般的な比較研究を、どのように遂行することができるのかというものである。

実証主義に基づく帰納的なアプローチに慣れた読者のなかには、私の主張を支える「証拠」や「資料」をさらに要求したり、地理的な範囲が狭すぎるのではないかと問う向きもあるだろう。あるいは、私のテキストや視覚資料の選択の幅が狭すぎて、分析の信憑性が制限され減るのではないかと。しかし留意していただきたいのは、この研究が日本の近世・近代史の一般的な概観を意図したものである、江戸の民衆文化を調べることで「日本」と呼ばれる場の包括的な図柄を創りだそうとしたものでもない、ということである。本書の目的は、文化と社会が形成される場における政治力学の対話論理を歴史化するとともに理論化するために、特定の問いをいくつか取り出し、応答することにある。すなわちジェイムソンがかつて「不断の文化革命」と呼んだものを、近世日本という文脈で検証することだ。<sup>(3)</sup>

この意味で、本書の視野は限定され選択されたものであって、そのことを私としては不十分と考えるよりも、新しくオリジナルな解釈の試みとして理解していただきたいと思う。以下、この序章では、本研究の概要を提示していきたい。

この研究で私が提示する主な問いは以下のようなものだ。江戸の都市民衆文化を統制することが、ことに一八世紀後期以降、社会秩序および社会的慣習を維持しようとする徳川幕府の試みの中核にあり、それが徳川政権自身の政治的イデオロギー的正統性を擁護することに繋がっていたのはなぜなのか。民衆の文化実践のどのような側面が、権力を引き継ぎ、それによって国を資本主義国民国家へ作り変えるプログラムの焦点としたのか。徳川幕府と初期明治政府とのあいだで、民衆統制のあり方とイデオロギー的合理化という点で差異はあったのか。もし違いがあったとすれ

ば、それはどのようなものか。そして、このような差異が日本の近代的変容について意味するものは何か。

この時期を研究する人文学者や社会科学者は、民衆文化の政治的な意義を、温和で非政治的な現実逃避活動——うたかたの遊びと享楽——と貶めるか、都市民衆の武士支配層への不満の表明に注目することで、「文化的抵抗」や風刺や嘲笑による「脱中心的な抵抗、分散行為」といった安易な概念をもちいて彼らに政治意識が存在したことを論じてきた。<sup>(4)</sup> こういった見方では、いかにして、またなにゆえに為政者や知識人にとつて、一見すると非政治的な領域に属する遊びや享楽の文化が社会統治上の問題として浮上するに至ったのかをきちんと説明することができない。さらにこうした研究では、どうして明治新政府が民衆文化を統制するという前任者の政策を受け継ぎ、それを近代資本主義国民国家形成のプログラムの焦点としたのが分析できてこなかった。この点で、私の理論への関心は、一連の歴史上の問いに効果的に対処し、近世日本(徳川および明治初期)の政治が民衆文化の問題をめぐってどのように機能していたかを理解する新たな方法を探りたいという思いから発している。

先に述べたいくつかの問いに迫るために、本書は民衆の文学、視覚、演劇表象という具体的な形式と、社会秩序(身分制および労働の分業)の編成、また秩序の再生産をもたらす論理とイデオロギーに関わる言説との接点に焦点を合わせる。江戸の民衆文化における表象形式を考えると重要なものは、文学と芸術とにまたがる原理、すなわち私がミハイル・バフチンによるフォードル・ドストエフスキーの研究に倣って援用する「対話的想像力」(dialogic imagination)の原理である。<sup>(5)</sup> 多様な声や視点を対話論理的に交差させることで、江戸の民衆文化は徳川社会の複数で互いにせめぎあうイメージを作り出したのであり、そうしたイメージが一八世紀への移行期に広範に感受された矛盾する多様な現実を映し出していたのだ。こうした諸矛盾のもとも顕著なものとして、社会と経済を身分的階層によつて統制しようとする試みと、現実における階層の混乱との不協和が深まりつつあったことが挙げられる。武士の富を支えていた米経済が、形式上の階層としてももっとも下位にあった——遊民と呼ばれた芸能民を含む「非人」の上に位置付

けられた——商人階級が支配する貨幣経済の興隆によって凌駕される事態が生まれてきた。大衆の娯楽文化(演劇、盛り場、印刷文化、読書、ファッション、見世物といったは、遊民の存在と密接に連動しながら、商人や職人のような裕福な町人たちによって支援され、文化的革新と自由な社会交渉の磁場となつて、しばしば武士階級の人たちをも巻き込んでいった。

対話的想像力は、身分制によって形式的に整序された社会秩序を攪乱するようなダイナミックな社会的相互交渉を捉え、それに注目したのである。さらに、徳川権力が必死に醸成し守ろうとした公のイメージ——秩序、調和、安定——とはまったく異なるイメージを作り出すことによつて、そのような社会交渉から生じる緊張をさまざまな局面で明らかにするのだ。対話的想像力が暴くのは、社会の全体性が綻んでいく有り様であり、多様な矛盾のなかで躍動する社会的現実に対する新たな理解である。よつて本書は、文化表象形式の生産と、権力の社会的経済的回路との接点に注目することによつて、いかにして身分的階層秩序の転覆が文化の領域における交渉と闘争の出現と内在的に関連しているかを分析する。

文化と社会経済との関係を理解しようとするとき重要なのは、公の言説(支配的な知的言説を含む)と民衆の言説との間で繰り広げられた、身体の意味とその社会的機能をめぐるせめぎあいである。本研究が明らかにするのは、徳川幕府が身体とその欲望、あるいはそれが醸し出す過剰な意味やエネルギーに対して根本から不信を抱いており、それに基づいて統治のメカニズムを構築したこと、身体の社会的意義を米経済の遂行に役立つ生産労働機能に限定しようとしたということだ。儉約令を施行し、耐乏と質素な生活を庶民が守るべき最高の道德的美徳と定めることによつて、為政者はこうした原則に反する身体を「怠惰」で「不道德」と貶め、罰と規律を課した。にもかかわらず大衆文化は、都市の商業的娯楽文化と結びついた「怠惰」な身体を寿ことほぎ、徳川体制の創設者によつて設けられたイデオロギー的制限のなかでは想像すらできなかつた新しいアイデンティティや感性を作り出すための、ほぼ無尽蔵な源泉として身体